

## はじめに

あなたは今、オーディション会場にきています。もうすぐ自分の出番です。さて、あなたは何をしますか？

緊張で震えないようにストレッチをする。

自己紹介で嘯まないように口を動かす。

課題のお芝居がうまくできるように祈る。

自分なりの幸運の呪文を唱える。

まあ、どれも間違いいではないですし、やって損はないかもしれませんが。

これまでずっと芝居の研究、肉体練習、発声練習などをやってきて、やっと希望する舞台やドラマ、CMの入口に立とうという時です。緊張もするし嘯みもするでしょう。

では、お聞きします。

あなたはオーディションの準備をしてみましたか？

お芝居の経験者であれば、シナリオや台本に沿って役柄を研究したことはあったでしょう。

役の気持ちや思考、行動を幾度となく演じてきたことでしょう。

しかしオーディションにはそんなものではありません。

あなたに与えられる役柄がどんな個性を持っているか、どんな境遇かなどは知る由もありません。

あらかじめ知らされることもあります。そもそもオーディションと言う短い時間の中で、あなたの真の演技力を完璧に表現することは難しいでしょう。

そうです。あなたはオーディションでやるべきことをまったく知らないのです。

だから祈ったり、体を伸ばしたり、呪文を唱えるくらいのことしかできないのです。

しかしもう恐れることはありません。怖がることはありません。

これから『オーディション』というあなたが出演する作品と一緒に学び、創っていきましょう。

まず最初にカラーマーカーを用意して下さい。色は何色でも何本でも結構。赤鉛筆でも構いません。

この本にはオーディションを突破し、問題を解決する秘訣が書かれています。その中でも自分にとって大事なだと思っ箇所をマークして下さい。

そして自分でマークしたことを何度も読み返して、それを実行して下さい。

またこの本は余白を余分にとつてあります。その余白に自分の感じたこと、考えたことを書き込んで下さい。

この本は綺麗なまま保存するものではありません。自分の想いと共にボロボロにしていく道具です。

書き込んだことを振り返り、考えが変わったなら書き直して自分だけのテキストを作して下さい。

あなたは今、オーディション会場に來ています。もうすぐ自分の出番です。

さて、あなたは何をしますか？

もちろんこの本の、自分にとつて大事な部分を読み返し、自分の書き込みを確認し、心を静かにする。そして迷うことなくオーディションを勝ち獲る準備をし、その想いを實現することでしょう。

未来のあなたの為に心してページを開いて下さい。

さあ始めましょう！





目次

はじめに 3

第一章 オードイションとは 15

オードイションはあなたに会うためのきっかけ 17

タレント事務所のオードイションとは 19

タレント事務所には所属すべきか？ 22

数合わせのオードイションはマネージャーで決まる？ 26

大人の事情 事務所の事情 30

初めから大作の主演になる自信がありますか？ 31

どんな役者でも小さな役から始まる 33

オードイションは大貧民 35

## 第二章 オーディションのしくみ 39

オーディションのセッティング 41

会場は大会議室から四畳半まで 45

CMの場合は事情が違ってくる 47

ドラマはやや込み入ってくる 52

割とチャンスがあるドラマのオーディション 55

## 第三章 オーディションの実践 63

まず受けることから始まる 65

バイトも大切だけど、本業は何？ 67

オーディション会場への道と時間 69 秘訣1

- 何を着るべきか 72 秘訣2
- ドアを開ける時の心構え 76 秘訣3
- あいさつができなければ受ける資格はない  
どのタイミングで椅子に座る? 82 秘訣4
- 受け答えの第一声はかすれてしまうもの 86
- 視線はどこに置くべきか 88 秘訣5
- いつも笑顔は実はマイナス点 90
- 初めてのセリフの読み方 91 秘訣6
- オーディションでの演技について 95 秘訣7
- 段取りのトラブルについて 99 秘訣8
- 気が削がれる邪魔なこと 102
- 立ち居振る舞いでブレない方法 104
- 立ち去る時も見られている 107



## 第四章

この後はもう何もできないことを知れ	109
CMのオーディションの場合	110
タレント事務所のオーディションの場合	117
肌を見せるオーディション	120
歌を歌うオーディション	124
あらかじめセリフを渡されている場合	126
原作がある場合	132
オーディションの後	137
オーディションが終わったら	139
人の好みで決まることも	140
次のオーディションは名前になる	141

オーディションの積み重ねに負けるな 144  
もうすぐだから時間がないと考える 145

## 第五章

役が決まったら 149

オーディションに受かったら確認すべきこと 151

リポーターの注意点 153

インタビュアーの仕事とは 155  
秘訣 10

リラックスする 集中する 160  
秘訣 11

カメラとの共同作業 166  
秘訣 12

フリップのさばき方 169  
秘訣 13

社員のエキストラの場合 173

その空間と時間を創りだす 178  
秘訣 14

## 第六章

- その他大勢の演じ方 186
- 工夫と意見は提案すべきか 188
- 一般人としてのインタビュアー 194
- 子供という俳優 親というマネージャー 196
- あなたが自身がファンであれ 199
- 仕事が終わったらバイトに行こう 203
- 秘訣 15
- 次のオーディションに必ずつながる 206
- オーディションの準備 207
- オーディションのために何をすべきか 209
- 運動が苦手な人々 210
- カラダを作るためにカラダを伸ばす 214

たった一つを徹底的にやってみる	217
演技のトレーニングは集中力のトレーニング	219
温度を取り入れる演技	223
セリフとト書きの関係	226
笑いながら、話しながら服を着てみる	236
役作りは動物園に行こう	238
人は隠す動物	241
声は誤魔化しがきかない	243
次のオーディションのイメージ	249
	秘訣 16
	秘訣 17
	秘訣 18
	秘訣 19
	秘訣 20
	秘訣 21
	秘訣 22

あとがき  
253



## 第一章

### オーデイションとは



## オーディションはあなたに会うためのきっかけ

ドラマや舞台、CMなどではほとんどの場合、役者さんが必要です。

制作する人たちはそのシナリオや台本に見合った役者さんを用意しなければなりません。この役はあの人で、この役は誰それですんなり決まれば問題はありませんが、ここで問題になるのが「予算」です。

作品を創る「お金」には限度があります。舞台やドラマならば協賛してくれる企業、CMならばもちろんその企業が制作するお金を準備します。

中には映画を創る監督やプロデューサー自身がお金を集めてくる場合もあるでしょう。その場合は特にお金にはシビアです。予算をオーバーすることは絶対に許されません。与えられた予算の中で作品を創らなければ赤字となり、誰かが損をしてしまいます。

中には「友達だからお金はいいよ」と言ってくれるスタッフがいるかもしれませんが、自主映画などでは手弁当で参加してくれる役者さんもいます。しかしずっとそれができればいいのですが、やはり生活していくにはお金が必要です。作品創りに参加し、その対価を貰ってこそはじめて「プロの仕事」と呼べるのです。

だからこそ制作する側はみんなにお金が行き渡るように、予算の中で納まる作品創りをしなければなりません。



さて、「あの役者さん」と誰もが知っているキャスティングが提案でき、その役者さん本人の同意を得られれば問題は無いのですが、皆が知っている役者さんというのは大抵お金が掛かります。

なぜならば「売れている」からです。顔が売れていると言っことは、認知度が高いと言っこと。それだけに経験も積み、役柄に対応できる力を持ち、世間のウケもいい。CMならば「あの人が薦めている」という安心感を得られます。

そんな人はギョラ、いわゆるお金が掛かります。CMなどでは年契（年間契約）と言って、一年間他の類似した商品のCMに出ないようにする約束として何千万、時には何億というお金が必要です。宣伝費にそこまでの投資をする余裕がある企業は限られてきます。

だったらどうしよう？そうだ「あの役者さん」の「ような」人を連れて来よう、となるわけです。

例えば「あの役者さん」は、温和でいつもニコニコしているイメージがあるが、シリアスな役どころもこなす。細身で割と背の高い男性で声は低め。標準語を話し訛りなまはなく、渋いとまではいれないが浮わつてない。年齢は四十代後半などなど。

クライアントも「あの役者さん」のイメージはみな持つていて、「あの役者さん」だったら何も言わずにOKで、しかも「あの役者さん」はお金が掛かるからますます呼べないことも認識している。だったらそんな雰囲気、そんな役どころの人、そんな感じの人を探そうとなるわけです。

その手段が「オーディション」です。

色々な役者さん、タレントさんの情報を集め、書類で大まかに選り出し、実際に会ってみる。

そして制作サイドが「この人なら」と選り出し、テストで演じてもらう。

「あの役者さん」よりはるかに知名度はないが、なかなかいい雰囲気を出していて、似たような感じを受ける。しかも時にはそのCMによって、その人が「あの役者さん」と言われる程有名になる場合もあります。

そんな時は制作サイドは「オレたちの目に狂いはなかった」と自信を持ち、同時にこう考えます。

「あんなオーディションをまたやりたいな」と。

オーディションは人を見る場です。

さらに言うと特定の作品のオーディションでも、実はその作品のためだけではありません。

オーディションはその人の未来の可能性を発掘する場なのです。